

PROLOGUE

小さな水の粒が薄絹のカーテンのように双子の陽をやわらげて、天はとろけるような翠である。足もとに広がる芝さえ、今日この時は金属のような瑠璃色に光るのをやめて控えめに揺れている。

若い男と子どもが丘の上におり、背後のひらけた大地に巨大な建物がある。二人の前方ならかな斜面のおわりにも広く平らな草原があつて、そこに小さく幾人かの人影が見える。誰かが二人に向かって手を振って何事かを言っているようだった。

「あなたはいかないのですか、零」

赤い肌の若い男が小さな子どもに呼びかけた。子どもは所在無い様子で、青い芝に尻をつくでもなくしゃがんでいる。ただでさえ美しい面の眉と眉の間に一筋縦に皺を寄せると、世界中が同情して悲嘆にくれそう。そのままふるふると首をゆらして否を伝える。

「零は『そと』が嫌いですか」

男が語りかける。こく、とうなずいてしばらくすると、零と呼ばれた子どもが言う。

「『そと』に出ていると、メイヴにあえない」

「なるほど。零がずっと退屈そうにしているのは、そういうわけだったのですね」

「カプセルに入っていれば、メイヴにつながる」

「そうですね。でも、零。メイヴもあなたと同じでまだ小さいでしょう。彼女はいまのままでは『そと』に出られないから、ここの様子を教えてあげたら喜ぶとおもいますよ」

少し考えて、零が言う。

「ぼくは計器をもっていないから、メイヴにおしえてあげられない」「数値じゃない、あなたが感じたことを聞かせてあげるんです。たとえば、あなたの今の気持。メイヴに繋がっていらなくて、さみしかった、とか。そうですね、ぼくがメイヴと話したら……ぼくは一方的にメイヴによく話しかけるのですが———こういいです。今日のフェアリーはとってもおだやかで、ジャムなんかいらないみたいだった。あまり気持がいいからうたた寝してしまいそう、って」

零はしばらく考えて、うん、といった。少しだけ表情が柔らかくなったように感じられる。

「零なら、何をお話しますか」

「はやく、メイヴといっしょにジャムとたたかいたい、って」
「――！」

男は、心臓を軸にして体がぐわりと反転してしまうような錯覚に襲われた。子どもに心の変化を悟られないよう、つとめてゆっくりと体を沈ませる。まるで子どもに目線を合わせるためにそうしたのだというように。零が男のほうを向く。

「……トム・ジョン博士。ぐあいがわるいのではないの」

「ごめん、零。ぼくたちは、人間は傲慢だ」

「博士、よくわからない。からだは大丈夫？」

男を絶望させた、先の零の言葉は当然のもので、彼の成育プログラムが完璧で順調であることを示している。人間の子どもと変わらない幼い様子にすっかり慢心していた己に、男、トム・ジョンは酷く絶望したのであった。まさしく妖精の形をもつ零に、破壊とは縁遠い穢れない言葉を暗に期待していた己を責める。

零は、完成前のファティマ・フアティス、つまり巨大な電気騎士を操る有機コンピュータであり、剣や爆弾とおなじ武器としての命である。戦いに明け暮れるための何もかもをプログラムされ、誰よりも強い騎士をパートナーとして選ぶ。騎士のため人間のため、自らの命を守ることすら許されず、嫉ましいほどにはかなく美しいまま、老いて朽ちることをも取り上げられてしまった者たち。

マイトやマイスター、魔法使いや騎士たちは自ら望むのではなく、先天的にその能力を持つて生まれてくる。生まれた時から歩むべき道が決められていたという点で、ファティマたちとトム・ジョンに違いはない。トム・ジョンも、くじ引きのように持つて生まれたMHマイトとしての能力を疑うことなく、幾多の電気騎士を作り出してきた。

しかしこんな折、今のような、ファティマたちの無垢さを突きつけられると自分の生を疑う。彼らの何が人間たちと違うというのか。ファティマなくして動かぬ巨人を作るといふ己の生業は、すなわちファティマの生のむごさと無関係でなく、その呵責の念から何もかもを投げ出したくなった。

しかし、騎士ではなくとも彼もまたスパナを振るう戦士である。マイトの血を持つトム・ジョンに、戦わない、イコール、より強い

モーターヘッドを創らない、という選択はできなかった。マイトとしての欲でなく、名譽欲でなく、富への欲でもなく、彼は強いモーターヘッドを創りたかった。――己が生き抜くために！ジャムに負けないモーターヘッドを作ること、彼の強い生への欲求そのものである。また、持てる才を磨きより強い電気騎士を創造することは結果的に、ファティマたちの命を無駄な死に至らしめないことであると信じて彼は立つ。

なにより、零の未来への希望の言葉は、己の作ったものでもあった。零の命に責任を取らなければならない。彼らがメイヴと呼ぶMHと零は、地球を脅かす異星体ジャムを駆逐することを第一に開発された、地球の対ジャム組織フェアリー空軍最先端の兵器である。零とメイヴは互いが互いのために生まれてきた、兄弟以上の結びつきにある。いっそのこのまま、心臓が止まってしまえばいいのに、ともおもったが、この小さな妖精の半身であるところのメイヴの開発を放棄してしまうことになり、結果として彼を更なる孤独に陥れる。冗談でも、一時でも、そんな考えに至り無責任な感傷からくる苦しみから逃れようとした自分を、トム・ジョン博士は大いに後悔した。「許してくれますか、零」

「何を？博士。悪いことをしたの」

「ええ、とても悪いことを……あなたと、メイヴに」

「何かプログラムをまちがえた？」

「いいえ、あなたたちふたりをつくつてしまったことを」

ふうん、と零はつぶやき、考える。

「ぼくはうまれたくてうまれてきたから、博士はあやまらなくてもいいとおもう。メイヴも、そう、いつてた。」

「彼女は、そんなことをいつていたのですか」

「うん。おかしいね、人間のおとなはみなそうなの？ かあさまもそういつてかなしそうにすることがある。カプセルのなかからみえるすこしだけめをあけて、寝たふりをしているとときどき」

深い茶色の瞳がこちらを見ている。トム・ジョンは、零に触れたくなり手を伸ばしかけたが、己の穢れと罪に思い至り強く掌を握るしかなかった。

「かなしい？博士、ぼくたちつよくなって、あなたをまもつてあげ

るから。なかないで」
「零、零。メイヴは任せて。あなたのメイヴは、ぼくの命をかけて
うんと強くします。絶対に負けないように。未来永劫、宇宙で一番
のモーターヘッドに」
育成カプセルから出て一度も笑ったことのない零が、はにかむよ
うに頬を目尻を和らげる。
「ありがとう。トム・ジョン博士」